

平成20年度 第1期展

大東京

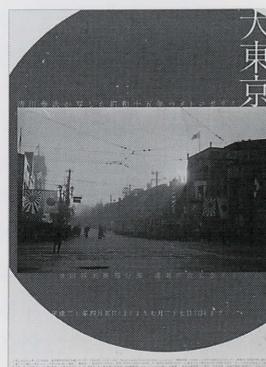
清川泰次が写した昭和十五年のメトロポリス

会期：4月5日～7月27日  
入場者数：1,630人  
担当者：高嶋雄一郎

本展は、のちに抽象画家として独自の道を切り開いていくことになる清川泰次が、大学生であった昭和15年11月10日に撮った写真を時系列に並べ、展示したものである。フィルム三本分に収められたこれらの写真は、全て当時清川が愛用していたライカのIIIaで撮影された。

清川は、寄宿先の田園調布に始まり、大学のあった日吉キャンパスでの記念式典、そのあと銀座に繰り出して街を埋め尽くす群衆を記録したのち、夜更けまで続いた花電車によるパレード、その後の友人たちと歓談の様子などを写している。清川が学生時代に撮影した白黒写真は約5000枚近く現存しているが、このように時系列で撮影を連続的に行なうのは非常に珍しい。これらの写真は、若かりし頃の清川青年の被写体に対する真摯な眼差しや芸術家としての萌芽が窺えるのみならず、当時の東京の町並みや様々な出来事とどめる貴重な記録ともなっている。

また、清川が当時これらの写真に対して特別な思いを持っていたことを現すのが、彼が二冊にまとめたアルバムだ。彼は二日の出来事を二冊のアルバムにまとめ、これらの場面に対する注釈を自ら万年筆で丁寧に記している。このアルバムはこれらの光景が撮影されるに至った背景と清川の思いを知るための貴重な一次資料であり、よって展示室の中央に設置した展示台の上に、象徴的に展示した。



B2ポスター

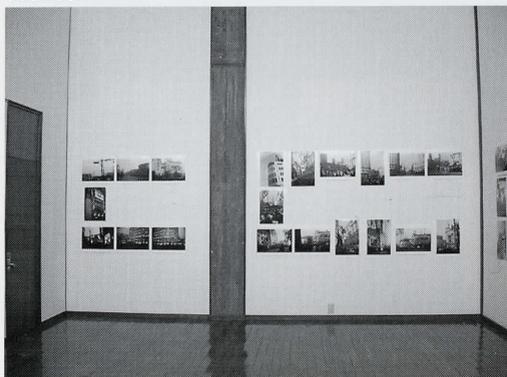


チラシ裏

展示内容

写真作品 91点、アルバム 2冊、書籍 27冊  
絵画作品《走る太陽》1959年、《無題》1950年頃

展示風景



# 平成19年度 第2期展

## WORDS OF A PAINTER

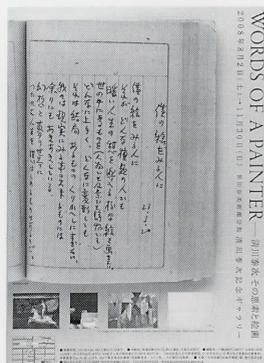
### 清川泰次 その思索と絵画

会期：8月2日～11月30日  
 入場者数：679人  
 担当者：池尻豪介

画家が語る言葉。これは絵画とはまた異なる形で、その内なる感性や思考を端的に表現するものだといえる。独自の抽象表現を展開した清川泰次は、戦後ニューヨークでの個展に際し作られた小冊子『WORDS OF A PAINTER』をはじめ、自ら出版した画集の中で、作品制作における信条や人生観を記している。

また、社会全体が不穏な空気に包まれていた昭和10年代後半、彼の学生時代の日記やアルバムには「幸福」や「自由」を噛みしめるかのような記述がみられる。この青年時代における経験は、晩年の自由な絵画表現に影響を及ぼしたのではないだろうか。

本展では清川泰次の言葉と絵画作品を通じて、その思索の変遷を考察した。



B2ポスター

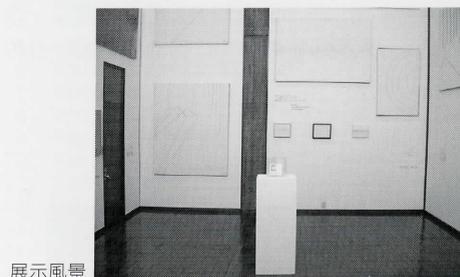


チラシ裏

#### 出品目録

No.	作品名	制作年
<b>1990-2000年代の作品</b>		
1	Painting No.12000	2000年
2	Painting No.497	1997年
3	Painting No.2296	1996年
4	Painting No.2396	1996年
5	Painting No.2996	1996年
6	Painting No.3296	1996年
7	Painting No.3896	1996年
8	Painting No.1695	1995年
9	Painting No.2095	1995年
10	Painting No.2195	1995年
11	Painting No.2295	1995年
12	Painting No.2995	1995年
13	Painting No.194	1994年
14	Painting No.494	1994年
15	Painting No.2694	1994年
16	Painting No.2894	1994年
<b>1970-1980年代の作品</b>		
17	Painting No.484	1984年
18	Painting No.3583	1983年
19	Painting No.382	1982年
20	Painting No.882	1982年
21	Painting No.3781-B	1981年
22	Painting No.557980	1980年
23	白の中に白い点々	1977年
24	Painting No.66-73	1973年
<b>1950-1960年代の作品</b>		
25	Gray&Black&White	1967年
26	イタリアの空(群像表紙)	1962年
27	グリーンのF10号	1962年
28	むらさきの絵-63	1960-63年

No.	作品名	制作年
29	早春-56	1956年
30	海の見える街	1956年
31	20号の白の風景	1956年
32	親子	1951年
<b>1940年代の作品</b>		
33	母子像	1948年
34	ヘガス	1947年
35	自画像	1947年



展示風景



# 平成20年度 第3期展 旅とカメラ

## —清川泰次が写した昭和日本紀行—

会期：12月6日～2009年3月22日  
入場者数：995人  
担当者：吉川美栄

今回の紹介した作品は、清川が昭和10年代に写した日本各地の旅の情景である。

清川は学業の合い間をみては友人と連れ立って、日本各地へ赴いた。この頃、明治以降から産業や軍事的需要に伴いめざましい発展を遂げた鉄道は、昭和に入るとさらに国内各地へ敷設され、旅が大衆にも手の届く余暇として長距離旅行への意識が芽生えはじめた。そして昭和2年新聞社主催の国民投票による「日本八景」の選定や、昭和6年の「国立公園法」の制定などによって国内の名勝地を国民へ知らしめる機会が重なった。こうして、交通機関の発展や観光地に関する情報の広がり、大震災や金融恐慌と不穏な社会状況から機運を高めればかりに、人々は明るい旅への関心を向けていった。

清川泰次も、本の中でしか知らずにいた日本の名勝を求めて足繁く各地へ向かった。

旅先では必ず愛用のカメラを携え、それらの風物やカメラにおさめた。そこに写されているのは、名勝地への好奇の視線だけではなく、人々が行き交う駅のざわめき、他の旅人が景色に興じる姿、ふと見上げた時に見つけた入道雲など、清川が土地で触れ、感じた空

気そのものまでもが写されている。旅という日常を離れた特殊な時間と空間へレンズを通して見つめる行為は、その若き感覚を研ぎ澄ませ、凝視して心に映った風景を芸術表現として捉える視覚の探求でもあったといえる。また、清川はしばしば旅から帰宅してほどなく、撮影した写真をアルバムに纏めた。自らが選定した写真の傍らには、その時の撮影の様子が記されている。そこには撮影への思いが垣間見られ、清川が出会った新しい風景との新鮮な出会いが綴られている。

本展では、清川泰次が昭和10年代に写した日光、修善寺、箱根、大島、奈良などの7つの旅の写真と、それを纏めたアルバムを併せて展示した。旅がひとりの青年に与えた感動と創造の時間を、写真と丹念に纏められたアルバムから触れ、鑑賞者も旅に思いを馳せる機会となった。

### 展示内容

写真作品 74点、アルバム 9冊、書籍 2冊

### 絵画作品

- 《左にパールグリーン右にペールイエロー》1958-59年
- 《オキサイドグリーンの丸いかたまり》1960年頃
- 《イタリーの空》1962年
- 《ブルーと紫》1962年
- 《白の中のパールグリーン》1962年



B2ポスター



チラシ裏

### 展示風景

